

ラブコメ主人公は、無数のヒロインの

『屍』の上になりたっている。

原作：曾々木 小夜子
制作協力：漸道 光定

I 朱夏編

ピンポン！

いつの間にか寝ていたらしい。古いアパートなのに音量だけは無駄に大きい呼び鈴の音が、俺を眠りから引きずり下ろした。

ねぼけ眼をこすって軽くうがいをし、一分ほどかけて軽く身だしなみを整える。目にとまった時計は十八時時十五分を示していた。ついでにカレンダーを見ると、今日は五月二十一日だということがわかった。

また親父が何か頼んだのか？ 毎度配達員さん御苦労さまです。

心の中で配達員さんをねぎらいつつ、インターホンの画面を付けてみると、そこに映ったのは配達員さん、ではなく見知らぬ少女。

少し茶が混じった黒髪と、首の所くらいで切りそろえられたボブカット。顔立ちからして高校生くらいの、可愛い女の子。

だれだろう？ まさか親父の隠し子か？

「はい、里谷です。どちらさまでしょうか？」

恐る恐る聞いてみると、

「隣に引っ越しました。小日向こひなたと申します。引っ越しのあいさつに伺いました」

そう言ってからペコりと一礼。

インターホン越しで相手の顔が見えないということもあるが、同級生には全く見かけない丁寧さに気品が感じられた。

「分かりました。今出ますね」

俺は、事前に軽く身だしなみを整えてよかった、などと思いつつはドアを開けた。

そこにいたのは、俺の予想よりずっと華奢な女の子。

そして、俺はこの華奢な少女にいつになく心躍らせるのだった。

そう、

俺が彼女に興味を持った理由は実に単純で、一目ぼれだ。

「こんばんは、二〇四号室の小日向です。小日向満留こひなたみちるといます。よろしくお願ひします。——これ、もしよかったですらどうぞ」
そう言つて小日向さんは少し大きい箱を差し出した。持ってみると、少し重い。

「あ、はい。あの、よ、よろしくおねがひします」

よし、何とか噛まずに言えたぞ。

「ええ、こちらこそ、それでは」

そう言つて、最初と変わらない笑顔のまま、二〇四号室、俺の隣の部屋に入つていった。

——みなさんここに天使が住んでいます。

俺は二〇三号室——つまり俺の部屋に戻り、もらった箱を開けてみた。中身はタオル、洗剤などの生活用品の詰め合わせ。

中身の確認をしながら俺は思った。

メアド聞いとけばよかったなあ。

※ ※ ※

翌日、学校が終わつてから下校する途中、シャープペンシルの芯を切らしてしまつた事を思い出した俺はコンビニよつた。

センサーが俺を認識し、自動ドアが開いたので入ろうとしたら、

「あつ」

背後で声がした。

反射的に振り返ってみると、そこには小日向さん。

そして、

「こんにちは」

言いながら、俺の顔をみてスマイルをかます。

くおう、かわいすぎる。

「このコンビニ、よく通うんですか？」

「うーん、週に二度くらい、かな？ 小日向さんは、どうしてここに？」

「実は、シャープペンシルの芯を切らしてしまいました……よろしければ、一緒に行きませんか？」

なんと……？

シャープペンシルの芯を買い終えたあと、俺たちは最近読んだ本や好

きな音楽について語り合いながらアパートに向かった。

話してみると、小島さんはあまり若者っぽい話し方をしなくて、会話をしているだけでこちらの話し方もきれいになりそう。しかしながら、それでいて一切作っている感じもしない。そのせいだろうか、見かけによらず話しやすいし、「里谷君は、最近何の本を買ったんですか——？」とか、人懐っこくきいてくるので、かなり会話も盛り上がった。

気がつけば、もうアパートの前に到着。

……よし、そろそろこの辺できいてみるか。

「小日向さん、メールアドレスおしえてくれない？ いつでも連絡できると便利だし」

「へ？」

あれ？ なんで？ みたいな顔をされたぞ。

地雷を踏んじやったんじゃないかと内心焦っていると、

「どうして隣に住んでいるのに携帯電話で連絡するんですか？ 用があったらピンポンしてください」

と、笑顔で言われた。

あ、これ完全に拒否されてるやつだ。

などと考えているうちに、ではこれで、と小日向さんは自分の部屋へ消えて行ってしまった。

俺はその背中を見ながら、ある雑学を思い出していた。

——ウサギはさみしいと死んでしまう——
なるほど、俺は人間だったわけだ。

※ ※ ※

俺が連絡先交換を拒否された翌日の昼休み、何度も友人のコーヘイから「なんだか生気がないぞ」と聞かれるのに辟易した俺は、食堂に行っ一人飯を楽しむことにした。

ラーメンをすすりつつ、昨日の言葉を思い出す。

——どうして隣に住んでいるのに携帯電話で連絡するんですか？ 用があったらピンポンしてください——

昨日は完全に拒否されたと思っていたけど、よくよく考えたら、断り方が、少し回りくどすぎないか？

いや、俺を傷つけないための配慮だったのかもしれないな。でも、完

全に断られた訳じゃないし。

でも、いや、しかし——と、たっぷり昼休みを使ってあれこれ悩んだ結果、

「とりあえず、もう一度聞いてみる価値はあると思うな」という結論が出た。

その夕方、俺は小島さんの家のインターホンをピンポンする前に、近くのスーパーでリングゴを買っておいた。

そして、家に帰ってから爪を切ってヤスリをかけ、歯を磨くなど、念入りに身だしなみを整える。

もうそろそろ出ようかな。……その前に最終チェック。

洗面所の鏡の前に立って、にっこり笑ってみた。

うん、若干引きつってはいるけど、いいんじゃないでしょうか？

玄関に行き、ドアを開けた。

「いつてきます」

まあ、お隣に話しかけにいくだけなんだけどね。

ドアが閉じるのを確認してから、念のため長話してしまったときのために鍵をかけた。

二、三歩くらい歩くと、二〇四号室の前。

今の俺は、テスト前のような、心地よい緊張感に包まれていた。

うん、今なら成績上位は確実だね。

そう思いながら、呼び鈴を鳴らした。

ピンポーン！

「はい」

インターホンで応じると思ったら、小日向さんは直接出て来た。

出て来た小日向さんは、心なしか少し眠そうだった。勉強で寝てないのだろうか？ だとしたらタイミングが悪いかな。

俺は、頭の中で既に用意していたセリフを言った。

「親戚からリングゴが送られてきて、一人じゃ腐らせちゃいそうだから、もらってくれないかな？」

言いながらリングゴの入った袋を手渡したら、小日向さんはそれをまじまじと見つめた。

「わあ、ありがとうございます。リングゴ大好きなんです」

なんだか純粋な子供を騙しているみたいで、良心がチクチク痛む。

そろそろ本題に入ろう。

俺はポケットからケータイを取り出した。

「やっぱりさ、アドレスを交換しておいたほうが便利だと思うんだ。だから、交換しない？」

「はい？」

小日向さんは、昨日のような、なんで？ どうして？ みたいな不思議な反応。

やっぱり、だめか。

「あ、昨日が断ったつもりなら、ごめんなさい」

と俺が保身しておく、小日向さんは慌てた様子で、

「あ、いえ、私、普段忙しいので携帯電話を確認できないんです。だから、本当に用があるときは、私の家にピンポンしてほしいんです。それと、留守の時は、電話もほとんどつながらないので、余り意味はないんです」

なるほど。

でも、それだったら、俺が外にいる時にどうやって連絡をとるんだろう？

そう思って聞いてみると、

「……………」

小日向さんは少し考えてから話し出した。

「里谷くんもそうだけど、周りの人はみんな友達がおおくて人脈を重んじるけど、私は忙しいから、アドレスとか教えられても連絡を取らなくなるんです。だから、自分とアドレスを交換しても、アドレス帳の肥やしになるだけです。私自身そうなるのは嫌です。だから、私は流れで交換することは避けているんです」

なるほど、きつと小鳥さんのケータイは、着信履歴はたくさんでも、発信履歴はスカスカなんだろうな。

「もっと話していたいけど、もう暗くなってきたから、もうそろそろ帰ろうかな」

俺がそう言うのと、

「上がっていきますか？」

「——え？」

「何もありませんけど」

……これは、このまま家に上がってもいいという流れでしょうか？

というわけで、

「おじやましまーす！」

家上がることにした。

「あ、お茶とか出せませんけど……」

あわわ、そんな申し訳なさそうな顔しないで、

「あ、なら」

俺は、家でコーヒーを二杯沸かして持って行った。

ふっ、これで大丈夫だ。

入って気がついたんだけど、驚くほど、物が無い部屋だった。

どうやって生活してるんだろう、この人。

などと思ってしまうくらいに。

まず、キッチンには調理器具の一つも、冷蔵庫すら見当たらない。

そして、テレビや、CDプレーヤーといった、電子機器もない。

あったのは、一台の机と、パソコン、寝台代わりなのか毛布が畳んで置いているソファ、そして、大型の本棚に大量の本だけ。

1DKの部屋が広いと思ってしまうくらい何もなかった。

パソコンの周りに、数学Bの参考書、ノートがあったから、勉強でもしていたのかな。

いや、それより、

「もしかして、一人暮らしなの？」

「はい」

「小日向さんって、高校生だよな？」

「そうですよ」

高校生、一人暮らし、って、

「ちよっと、警戒心なさすぎじゃないかな？」

「へ？」

いやいや、

「親御さんはどこに住んでるの？」

「ここから徒歩十五分はなれた所にある家に住んでいます」

え？ 近くに住んでいたの？ そもそも、いくらアルバイトのできる年齢だからといって一人暮らし？ いくら小日向さんが可愛いからって

旅させすぎじゃない？

「いやいや、一人暮らしって結構危険だよ！ 駄目だよこんな簡単に俺

みたいな得体のしれない男を簡単に入れたら！」

上がっておいで言うのも変だけど。

「優しいんですね。ありがとございます」

「いやいや、例えば俺がここで変な気をおこしたらどうするの？ 小日向さんは可愛いんだから、そういう所はしっかりしていないと心配だよ！」

今も狭い空間に二人つきりっただけで、俺の胸の高鳴りが抑えきれないよ！

しかし、小日向さんは、にっこり笑って、

「そんな、私、里谷くんがもし変な気をおこしそうな人だったら、一緒にコンビニなんていきません。あと、私はそんな可愛くありませんよ」

うおおおおおおお！ 俺、そんなに好かれてたの？ ダメだ！ ニヤけが止まらない！ まずい、落ち着くんだけ！

「あ、もうこんな時間。そろそろ家に帰らないと」

俺は、興奮をごまかすために、帰る理由を適当にでっちあげた。出ていく際、

「ご実家のリンゴ、ありがとございます」

と、言われた。

——いいえ、それはスーパーのリンゴです。恐ろしく胸がチクチクする。

そういえば、調理器具がないのにどうやって食べるんだろ？

三日後、ポストを見たら、電話番号が書かれていたメモが入っていた。

〇〇—〇〇〇〇—〇〇〇〇

この間、渡し忘れてしまいました。外出中に用があったらかけてきてくださいね。

小日向

俺は、それから小日向さんの家を訪問するのであった。

※ ※ ※

俺の通う私立四十八願学園は、俺の家から電車、バスを利用して、片道四十五分かかる場所にある。途中、自転車通学の生徒たちが、「ヨイナラ坂」と呼ぶ、急斜面で長い坂を越える必要があり、通学するだけでかなりの体力を消耗してしまう。

俺が学校に着いたのは、八時十五分。上履きに履き替え、自分の教室に向かい、席につく。途中、飾り付けがされた笹を見かけた。ボンヤリと、昨日買ったラノベを呼んでいると、予鈴のチャイムが鳴った。

午前の授業を坦々と過ごしているうちに、昼休みとなったので、友人のコーヘイとその他の友達と席を寄せて、昼食をとっていると、

「里谷理人はいるか？」

ガラリという音とともにドアが開いて、誰かが大きな声で俺を呼んだ。

入ってきたのは、我が四十八願学園を代表する生徒会会長——者乃美もののみ小宮先輩だった。

小宮先輩

学園内一の成績、スポーツ万能、などと言った高い能力と、宝塚顔負けの彫の深い顔などから、同性のはずの女の子からよくラブレターをもらうことがあるらしい。そんな、このなにかとハイスペックな先輩は来年度の東大合格が確実視されているのだとか。

俺を含め、教室で昼食をとっていた人たちの視線が集中するなか、生徒会長はきよるきよる教室を見渡すと、俺と目があつた。

「君だな？ 里谷理人というのは」

近くに歩み寄られ、俺をにらむ生徒会長。

俺、何かしたっけ？

「えっ、はい、そうですが」

委縮して、しどろもどろになる。

マジで俺何かした？ ねえ、マジで！

内心パニックになっていたが、生徒会長そんな俺を気にせず、

「おめでとう。君が生徒会放送に応募した曲が選ばれたよ」

「え？ あ、はい」

生徒会放送とは、昼休みに生徒から曲を応募して、当選した曲を昼休みに流す、校内放送のことである。普通の学校と違うことと言えば、放送委員会や放送部ではなく、生徒会が主催していることだ。そのせいか、生徒会選挙のシーズンになるとそれを呼び掛ける内容が濃くなる。

生徒会長は、ポケットから折りたたまれたB6サイズの紙を取り出し

て、俺に見せた。俺の名前と共に、コテコテの萌えアニメの曲タイトルが書かれている。

「私は、こういった曲はあまり聞いたことはないのだが……とりあえず明日、生徒会室に持ってきてくれ」

言いながら、俺との距離を更に近づける生徒会長。
はわわ、ちよっ、ちよっとなすすぎやしませんか？

「わわわわかりました」

俺がそう言うのと、生徒会長は詰めていた俺との距離を離して一言。

「それじゃ」

生徒会長が去ってから、俺はコーヘイに冷やかされた。
もしかして、俺、からかわれたの？

※ ※ ※

俺が生徒会長にからかわれた翌日、登校して直ぐに、俺は持つてくるよう頼まれたCDをもって、生徒会室の前に立っていた。

コンコンと、ドアをノックすると、

「どうぞ」

の一声。覗き込むと、きれいな女性しかいなかった。というか、生徒会長だ。

机の上には資料の山。生徒会って何をやっているんだろう。

「今日は私が放送担当だね。早く入ってきたまえ」

「は、はい」

「あの、生徒会長」

「ん？ 小宮で構わんぞ」

「あ、じゃあ、小宮」

「くっ!?」

生徒会長は、突然胸に手を当てると、体を丸めてうずくまった。体が、ビクン、ビクンと震えている。

……どうしたんだろう？

「大丈夫ですか? 小宮!」

「……ぬおっ!」

大丈夫か? これ?

「小宮、胸が痛いんですか!」

「……ぐはっ!」

まじい、胸を抑えているから、心臓関連の発作か? どうすればいいんだ!

「小宮、落ち着いて、深呼吸してください! 三秒ほどかけて吸って吐いてください!」

とりあえず、落ち着かせるために、深呼吸をさせようとしたら、

「いや、大丈夫だ。ただのしゃっくりだ。問題ない」

そんなしゃっくりがどこにあるんだ。

「まったく、き、君は、常識と言うものがないのか! 誰が呼び捨てに

していいと言った!」

あれ? 怒ってらっしゃる?

「え? でも、小宮で構わないとおっしゃったじゃないですか」

なんだか理不尽だなあ。

「そ、それも確かにそうだが……ああ! もういい! 帰れ!」

顔を真っ赤にして叫ぶ小宮先輩。

「あの、小宮、先輩、CDここに置いておきますね! 失礼しました!」

「二度と来るなあ!」

俺は命の危機を感じたので早急にその場から離れた。

そして、昼休み。

教室で席を並べてから、手を洗いにいく。

戻ってきてみると、何やら騒がしい。見てみると、コーヘイとアラタがもめていた。

「だから、無条件で主人公の事を好きでいてくれるほうがいいだろ!」
と、コーヘイ。

「チョロインのどこがいいでござるか? 主人公がモテモテでスカしてたら殺意しかわかないでござるよ!」と、エセ侍口調のアラタ。

どうやら、ハーレムラブコメのヒロインは、主人公の事を無条件で好きでいるほうがいいか、それとも否かでもめているようだ。

「そもそもこう言った作品は主人公に自分を重ねて楽しむものだろうが! 自分に殺意がわくなんて、おかしいだろ!」

と、コーヘイが言うつと、

「その自分と重ねる主人公があまりにも非現実的かつムカつく態度であまりにも自分とかけ離れているのでござるよ! ここまできたらもはや

他人でござる！」

と、アラタが返す。

売り言葉に買い言葉。

二人がこうやってもめるのは毎度の事なので、俺は気にせず昼食をとることにし……いや、止めようよ？ 俺たちオタクが迫害されている理由って、こんな風に周囲を気にしないからじゃないの？

「二人とも、落ち着いて」

俺がそう言うのと、

「リトはどう思うんだ？」

「リト殿はどう思うでござるか？」

え？ 俺にふるの？ その話。

正直どうでもいいんだけどな。

俺はしばし考えてから言った。

「二人とも、PEAって知ってる？」

「？」

俺の言葉に、二人が困惑してしまう。

「PEAっていうのはホルモン的一种でね、女の子は、これを分泌させてくれた人を、無条件に好きになるんだ」

俺がそう言うのと、

「ほらみる！ やっぱリヒロインは無条件で主人公のことを好きになったほうがいいんだ！」

得意になってコーヘイが言う。

「ところがどっこい、このホルモンは、あくまで恋愛の初期段階において、つまり、好きになるきっかけを与えてくれるホルモンなんだ。だから、そこから好意に変わるかはその人次第」

「ということは、リト殿は、ヒロインは無条件で主人公の事を好きにはならないと言いたいでござるね？ ふふふ、やはりリヒロインは外道！」

今度は、アラタが得意になっている。

「まあ、待って」

俺は、続けた。

「他にも、このPEAにはね、食欲を高める、そして、性欲を高めるといった効果もあるんだ。つまり……」

俺は、わざとらしく言葉を区切った。

二人の反応をうかがってみると、

「まさか……」

「？」

頭のいいコーヘイは気づいたようだが、アラタは気づいてない。

俺は、そのまま、

「つまり、食欲の強い人は、性欲も強く、かつ、惚れっぽい」

俺がそう言うのと、

「なんだと！ 俺の愛しのくるみちゃんは淫乱ビッチだったのか！」

「つまり、拙者のサラサちゃんも清楚系ビッチ」

いや、そこまで言っていないけど。

「まあ、キャラクターの性格なんて、些細なものだよ。だから、二人とも、自分の好きな作品を楽しんだらいいんじゃないかな？」

俺がそう言うのと、なぜか二人は涙を流していた。

「さすがはリト兄貴」「リト殿マジパねえ」

まあ、食欲が性欲に比例するかどうかなんて知らないけど。

俺は、昼食を食べる事を再開した。

同時に、生徒会放送で、俺の応募した曲が流された。

よかった。無事に流れたみたい。

放課後になって、俺はコーヘイ達に断ってから生徒会室に向かった。

校則では、借りたCDは当日中に生徒会室に取りに行くことになっている。二度と来るなって言われたのに、行かざるを得ないなんて、気まぐしいな……。

曲がり角を曲がったら、

「きゃっ！」

「うわっ！」

さっそく最も会いたくない人、小宮先輩とはち合わせてしまった。

小宮先輩は、俺と目が合うと頬を赤くし、目をそらした。

「あ、あっ、お前！」

「は、はい！」

呼ばれたので思わず返事。

「……………」

「……………」

気まずい沈黙。その沈黙を破ったのは、小宮先輩だった。「まあ、その、なんだ……二度と来るなど言った手前、返しに行かざるを得ないと思ってな……」

「あ、やっぱり先輩もそう思っていたのか。」

「あ、いえ、こちらも取りに行くところでした」

「そ、そうか、なら……」

そう言うと小宮先輩はCDを返してくれた。

「それじゃ、ありがとうございます。小宮先輩」

「あ、ああ……」

なんだか少し後味が悪いな。でも、どうしようもないし。

俺は来た方向に向き直り、歩き出そうとしたら、

「ま、待てっ！」

小宮先輩に呼び止められた。

その声は、いつもより少し緊張を含んでいる気がした。

「なんだらう？」

「はい？」

——何かが始まる。よくわからないけど、そう思った。

でも、小宮先輩は、もじもじして、目を泳がせ、髪をいじくりまわしたりして、なかなか言おうとしない。

やがて、小宮先輩は口を開いた。

「……でもいい」

でも、その声はあまりにも小さすぎて、俺は聞き取ることができなかった。

「？」

俺は、本当に何が言いたいのか聞かため、わざとらしく聞こえないふりをした。

そして、

「べ、別に呼び捨てでも……いい」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

頭の理解力が追いつく前に、小宮先輩は逃げ出した。「ちよつ、待っ！」

よくわからないけど、俺は小宮先輩を呼びとめようとした。だが、小宮先輩は振り返る事はなかった。

※ ※ ※

翌日。

俺は小日向さんの家の呼び鈴を鳴らした。

ピンポーン！

相変わらず大きな音だなあ。

「はい」

俺が関心していると、小日向さんが出て来た。

今日も世間話である。

「毎度毎度、そっちの部屋ばかりじゃ悪いでしょ？ 今度は俺の部屋にこない？」

「いいですよ」

よし、そうときまれば、話は早い。

俺は、自分の号室のドアを開けて、小日向さんを招き入れた。

「わあ！」

小日向さんは、俺の部屋に入ると、目を輝かせた。

ふふふ、小日向さんを俺の部屋に入れる為に、わざわざ親父のいない日を見計らったのだ。

俺の部屋は小日向さんのもの比べて、親父と二人で住んでいるから

物が多い。

小日向さんは、本棚を見て、

「本が多いですね」

「そうだね。上から、小説、漫画、辞書、教科書、参考書だよ」

「少女漫画もあるんですね」

「うん、漫画は全部で七十冊くらいかな」

「これは？」

小日向さんが漫画の列から取り出したのは薄い本。

「それは同人誌。ファンが書いたものだよ」

「へえ、呼んでみてもいいですか？」

「はい」

「はい」

「はい」

「はい」

「はい」

it! Wait! Wait!

「あと二年たったからね」

「へ？ へ？」

小日向さんは、頬を少し赤くしていた。

「冗談だよ、ほら、中身は普通のギャグ漫画だよ」

パラララ……と、中身を見せた。

ちなみに、あと二年ほど経たないと見れないものは、辞書のケースの中に隠してある。

「里谷くんの読む小説は、私の好みと同じですね」

「へえ、そうなんだ。山崎豊子とか呼んだことがあるんだ」

「はい。あ、灰谷健次郎とか読んだことはありますか？」

「うん、もちろん」

などと、自分の好みの小説について一通り離れたあと、いろいろなビデオがあることに興味をもった小日向さんのために、ビデオを鑑賞することにした。

ビデオの内容は、二年ほど前に流行した、ブラックジョークが面白いコメディ映画だ。

ディスクを取り出して、プレーヤーにセットする。

小日向さんは、もうその時からわくわくしていた。

ビデオを鑑賞し始めてから、十五分がたった。

ふと、イタズラ心から、俺がタヌキ寝入りをしたら、どんな反応をするかな……？ と思つて、やつてみることにした。

と、その前に小日向さんをちらりと見る。

「あははは！」

小日向さんは、ブラックジョークに大爆笑中。

よし、やつてみるか。

「……………」

タヌキ寝入りを開始してから、五分ほどが経過した。まだ、小日向さんは俺に気づいていないようだ。

俺は、なんだかしびれが切れて来たので、

「すうーすうー」

わざとらしく寝息をたててみる。

「あははははは！」

やっぱり気づいてくれなかった。

くだらないことはやめようかな。いや、もう少し頑張ってみよう。

「すうーすうー」

そして、寝息を立て始めてから更に十五分くらいが経過した。

「……あれ？ 里谷くん？」

よし来た。

俺は、タヌキ寝入りがばれないように、わざとらしい寝息を立て続けた。

「どうしよう……」

おろおろし始める小日向さん。きゃわわ。

「もしもーし？ 里谷くん？」

小日向さんは、呼びかけつつ、俺の体をゆすりはじめた。

その際、俺の肩に手が触れた。

うわあ、小さい。

小日向さんの手は、俺の思っていたものよりも小さかった。

などと考えていると、耳元で、

「おきてくださいーい」

と言われた。

耳に伝わる微妙な体温。小日向さんが、俺の耳にキス出来るくらいに接近しているのかな？

急激に心臓の鼓動が大きくなった。

ドクン、ドクン。

まずい、ばれてしまう……。

俺がそう危惧したときだった。

「ふあ……なんだか私も眠くなってきました」

という声。

そして、物音がしなくなった。

え？

「……すう……すう……」

次第に寝息のような音も聞こえて来た。

数分待つてみたが、なんの変化も無い。

「え？」

起きあがって、体をゆすってみても起きない。

今度は、

「もしもーし？ 小日向さん？」

と読んでみたが、目覚める様子はなかった。

「どうしよう……」

などと悩んでいると、ふと、邪な考えがよぎった。

——今なら、何でもし放題じゃないか？

違う！ これは俺の本心ではない！ 静まれ！ マイリビドー！
でも、これは男の性でして……。

まずは、軽く頬つぺたを突ついでみようかな。

——うん、自分でもチキンだと思っうね。

はやる動悸を抑えながら、真っ直ぐに伸ばした人差し指を、少しずつ、
少しずつ、小日向さんの頬に近づけていく。

——五センチ。

なんだか、不安になってきた。

——三センチ。

本当に大丈夫なのか？

——センチ。

ええい！ ままよ！

——ふにッ。

ベビーパウダーをはいたようなくすみのない赤ちゃん肌、その一点
の曇りのない肌に、俺の指が食い込む。

わずかに弾力もあって、もっと触っていたいと思ってしまうような、
悪魔的な触り心地。

しかし、俺はもつとこの頬の柔らかさを堪能することはできなかった。
俺が頬つぺたを突ついた瞬間、スイッチが入ったかのように小日向さ
んの目が開いた。

「あっ」

目が合う。

さっきの胸の高鳴りが一瞬で消え、今は、頭から血がさっと引いたよ
うな感覚がする。

——まずい、ドン引かれた？

「へへっ」

しかし、小日向さんは、まるでいたずらっ子のように笑った。純粋な
子供のような、悪意のない可愛らしい笑顔で。

小日向さんは、驚き絶句している俺をみて、

「ビックリしました？ 寝たふり返しです♪」

一発目で胸にいかなくてよかったよ、ジョニー。

※ ※ ※

四十八願学園よひならは、私立だけあって、土曜日にも学校へ行かなくてはい
けない。

カリキュラムの進行速度をもう少し緩めれば土曜日に授業をする必要
もないんじゃないか？ と、いった意見は、四十八願学園よひならでは禁句であ
る。

ただ、終業式などの、長期休暇の始まりとなる式典を土曜日にされる
と、なぜか休日を損じた気分になるのは気のせいかな？

今日は七月二十三日土曜日で、かつ長期休暇の始まりを告げる終業式
だ。

校長先生の全くありがたくもない話を聞き、あれこれしてから、夏休
みが始まった。

「ただいまー」

学校から帰って、家のドアを開いた。すると、部屋の向こうから、可
愛らしい女の子が出て来た。

「ご飯にする？ お風呂にする？ それともわ・た・し？」
とてつもなく低音であるが、とても素敵な声が聞こえた。

俺は迷わず即答する。

「ちあきー！！」

「りょーかい！！」

「ぐほあああああああ！」
瞬間、可愛らしい女の子が、助走をつけて走って来る。俺にはそれが
見えた。

可愛らしい女の子が飛ぶ。両足から俺の腹に突っ込んでくる。俺はその
まま開いていたドアから吹っ飛ばされる。俺はアパートの壁に激突し
た。

絶望的なまでの痛みが襲った。

「ち、千秋……」

「いえーい！ ドッキリ大成功！」

そう言って喜ぶのは、俺の天敵にして父方の従妹の大河原千秋。おおかわらちあき夏休みにになると、毎年狭い我が家にやって来る、台風みたいなやつだ。髪は黒色。さらさらして艶がある。顔は至って可愛い、そして美しい。笑ったときに見える八重歯が特徴的。

よく言う、黙っていたほうがいい、と呼ばれる女だ。

千秋は、おれを蹴飛ばして満足したのか、もと来た部屋へ戻っていった。

ガチャリ

ついでに鍵も閉めてくれたようだ。やったね。

「あの、大丈夫ですか？」

隣の部屋から、天使、もとい小日向さんが心配そうにのぞきこむ。

「大丈夫だよ」

「本当ですか？」

「……だって、俺、マゾだから」

わお、小日向さんのひきつった顔って初めて見たぞ。

ドアガードは閉められていなかったから、カバンに入れていた鍵を使って帰宅することはできた。

自分の部屋に行ってみると、鈍い腹痛の原因が我が物顔で漫画を読んでいた。

本棚を見ると、辞書のカバーの中身は見られていないようだ。

「ねえ」

「なに？」

俺が話しかけると、漫画から一切目を離さずに答えた。

「着替えるんだけど？」

「そう」

この女……。全くどくつもりがないのかよ。

「……じゃあ、着替えるからね」

宣言し、俺は千秋がいるのにもかかわらず、目の前で着替えた。

しかし、俺が着替えても、全く興味がないようなそぶり。

この女は、満足するまでどくつもりがないようだ。

着替えてから俺は、小日向さんの家を訪問した。

ピンポン！

呼び鈴の音は相変わらず大きいなあ。

「はい？」

「小日向さん！ 八月八日は何の日だと思う？」

「立秋の日？」

いや、たしかにそうだけどさ。

「夏祭りだよ！ ねえ、一緒に行かない？」

さあ、一緒に行こうではないか。

「ふふっ、夏祭りですか、そうですね、時間はいつごろになります？」

「五時くらいから開始かな」

「そうですか……実は、その週は用事があるんです……」

申し訳なさそうに小日向さんは言った。

ああ、用事か……。まあ、仕方がないよね。小日向さん忙しいし。

「——なので、六時くらいからしか行けません、大丈夫ですか？」

何その言葉の区切り方！ てっきりダメなのかと思っちゃったよ！

俺は迷わず即答。

「うん、大丈夫だよ。集合場所はここでいい？」

「いえ、駅前の第一噴水にしましょう。出来る限り長く里谷くんと一緒にいたいので」

ニヤケルナ、オレ。

「うん、ありがとう！ 詳細は、このチラシを見てね。それじゃ」

俺は、あまり長くなると、千秋に怪しまれそうなので、早急に話を切り上げた。

小日向さんが家に戻るのを見送ってから、家に入ろうとすると鍵がかかっていた。

……まさか、あのおんなああああ！

鍵を開けてもらうために呼び鈴を鳴らすと、低くぐもった声が聞こえた。

「わたしにする？ わたしにする？ わたし以外だったら殺す」

ん？ なにか言った？ 俺は何も聞こえなかったよ。

俺は迷わず即答した。

「ちあきー！！」

「りよーかい！」

瞬間、千秋がドアを開けて助走をつけて走ってくる。俺にはそれが見え
た。

千秋が飛ぶ。俺の腹に突っ込んでくる。

——しかし、

「甘い」

俺は、身をよじってすれすれの所を回避した。

千秋は、そのままアパートの壁に激突した。

多分、千秋にはそれほど絶望的ではない痛みが襲っていることだろう。

「リ、リト……」

「いえーい。どつきりがえしだいせーこー」

わざとらしく棒読みで言っただけ。

俺は、仕返しされる前に早急にドアを閉じようとした。

しかし、千秋は俺に仕返しをしなかった。

あれ？ どうしたんだろう？

ドアを閉じるのを中断し、覗き込むと、激突したままの体勢のまま、
千秋は言った。

「……ねえ、リト、八月八日はなんの日だと思う？」

「春分の日」

「嘘つき、夏祭りでしょ、あと、それを言うなら秋分の日」

「そうだね」

「全く、ばかなんだから」

ため息交じりに千秋が言った。

「……浴衣は持ってる？」

「え？」

「一緒に行かない？」

「ふふっ、まあ行ってあげても……いや、ううん、行かない。行かない
から！」

——ホワッツ？

「ええ！？ さっきまでのいきたそうな感じはどこに行ったの！」

「だから、行かないって言ってるでしょ！ ばか！」

千秋は、頑なに行こうとしない。

「さっき行くなって言いそうになったじゃん！」

「言っくない！ あっち行け！ 消えろ！」

ええええ

「ちよっと待ってよ！ せめてなんでダメなのか教えてよ！」

俺がそう言うと、千秋は、突然悲しそうな顔をした。

今にも泣き出してしまいそうな顔。

うっすらと、目じりに真珠のような涙をためている。

「……だって、リトは、さっきの人と一緒に行くんでしょ？」

……私がいたら、邪魔になっちゃうじゃない。私は、リトの邪魔にな
るなんて嫌だし」

千秋は、俺と目を合わせずに言った。

……なんだ、千秋って、以外にいい奴じゃん。

でもさ、非常に申し上げにくいんだけど、

「あ、夏祭りは、二日間やるんだよ」

「え……？」

ポカーン

そんな言葉が当てはまってしまくらい千秋は呆然とした。

そして、

「早く言えばかあああああああああああああああああああ！」

「くほおおおおおおおお！」

千秋の拳がみぞおちに入った。

み、みぞおちに強い打撃が入ると、皮膚や、筋肉にそ、存在する知覚
神経への刺激のみならず、ふ、付近への内蔵への反射痛も、同時には、

発生し、横隔膜が、使えなくなり、こ、呼吸も困難になるので、ぜぜぜ
絶対にやめましょう。……ぐふ。

「もう、まあ、仕方がないから行ってあげる」

千秋は、俺を再起不能にしたにもかかわらず、夏祭りに行くことに同
意した。

そして、とびつきりの笑顔で、

「ありがとね。リトおにーちゃん！」

「ぐはっ」

な、なんだこの破壊力！

「だ、大丈夫？」

大きくのけぞる俺を心配そうに千秋が見つめる。

「ごめん千秋、ちよっともう一回リトお兄ちゃんって言うてくれる？」

「え？ リトお兄ちゃん！」

「もう一回！」

「リトお兄ちゃん！」

「少し恥ずかしそうな感じで！」

俺がそう言うのと、千秋は頬を赤くし、もじもじして、

「り、リト……お、お兄ちゃん？」

……たまるん！

「うん、もう大丈夫だよ！ 先に戻ってて、俺はちょっとその自販機で缶コーヒーを買ってくるから！」

「うん、わかった」

千秋がさった後、俺は缶コーヒーを買って戻ってきた。

玄関の前でドアを開けようとしたら、小日向さんが出て来た。

「ふふっ、やさしいんですね。リトおにーちゃん」

肉を打たれる痛みと、内臓へのダメージによる痛み、そして、呼吸困難が復活した。別に殴られた訳じゃないけど。

※ ※ ※

小日向さんと約束してから、数日たって、いま、やっとその前日、八月七日になった。

その晩は、明日、どのコースをまわるかしっかり計画し、睡眠不足で当日の健康を害さないよう、二十二時に寝た。

背中にかたい感触。……これは？

起き上って見てみると、リノリウムの床。

周囲を見渡すと、椅子を逆さ向きに乗せた机、落としきれなかったチ

ョークの粉が残る黒板。

ここは教室？ いったいいつの間に。とりあえず、ここから出てみよう。

そう思い、教室の扉の前に移動して、ロックをはずした。引手に力を込めると、

……あれ？ 開かない。

扉は、まるでコンクリで固めたかのように、びくともしなかった。力を込めた際に、少しも動く感覚がしなかったから、鍵を使って閉めてい

る、なんていうことはなさそうだ。

同様に、窓はロックをはずすことはできても、開ける事はできなかった。つまり、俺は閉じ込められたようだ。

ははーん。俺は夢を見ているのね。それにしてもえらく俺に優しくない夢だな。

あ、いいこと思いついたぞ。

大きく息を吸って叫ぶ。

「俺は満留ちゃんが大好きだ！ アイラブユー！」

夢の中でくらい、こんなこと言っているよね。

他にもあれこれ叫んだあと、頬をつねってみた。

——あいたたたた！

おかしいな。夢で怖い、嬉しい、といった感情を感じることはあっても、痛み、なんていう感覚を感じることもなくていままでになかった。

だとしたら、これは現実なのか？

などと、これは夢なのか現実なのか考えていたら、

「こんばんは。里谷理人」

突然の校内放送。

——誰？

「私は、《夜天少女》あなたの罪を裁く者」

俺の罪？ いや、そんなことより、

「……俺をここに閉じ込めたのは、あなたの仕業ですか？」

「はい。ここは私の創造した虚構世界です。現在、あなたが認識しているものは、全て、現実には存在しないものです」

虚構世界？ つまり、夢ってこと？

「ここは、俺の夢の中なんですか？」

「そうですね……これは、夢ですが、ある意味では夢ではありません」

夢だが、夢ではない。なんだそれ。

——ん、待てよ、もしかして、さっきのあれ聞かれてた？

「はい。あなたの情熱の叫びはしっかり最後まで聞かせていただきました！」

うわあああああああああああああああああああああああああああ！

「恥ずかしい！ 恥ずかしい！ 恥ずかしい！
俺は、リノリウムの床を転げ回った。」

「ふふふ、止めようかと躊躇してしまいました」
ジーザス！ 最後まで聞いていたの！

「……あれ？ というか、さっきから何で俺の心と会話してるんだ？
それは、夢ですから」

「ああ、なるほどね。」
「そろそろ本題に入りましょうか」

《夜天少女》が言った。

「里谷理人、あなたと一つ、ゲームがしたい」
ゲーム？

「説明しましょう。まず、ゲームは、あなたが少女と出会う所から始まります。少女は、一か月以内に一人ずつ、定期的に出会い、同時に、あなたに対して無条件に異性としての好意を抱きます」

無条件に好意を抱かれる？ なんだ、そのギャルゲーは。

「ここまでが、このゲームの第一段階です。そして、第一段階が終了すると、第二段階、『選択の時』に入ります。」

選択の時？

「『選択の時』とは、季節の変わり目に位置する日の始まりに発生します」
つまり、節分のことか。

「そして、『選択の時』であなたは、出会った少女の中から誰かを選ばなくてははいけません。選ばれなかった少女は死に、選ばれた少女は生き残ります」

え？

「実は、既に、第一段階は終了しているのですよ。心当たりはありませんか？ 三人の少女が、誰なのか」

——は？

「いや……まさか！」

「はい、今回の少女は、小日向満留、者乃美小宮、大河原千秋です。
あなたは、彼女たちを生かすも殺すも自由です。しっかり考えて選択してください。もっとも、あなたには、時間だけはたくさんあるので。」

——質問は？」

俺は、まず先に、最も気になってる事をきいた。

「何が目的なんだ？」

「そのことについては、教えることはできません」

「どうして教える事ができないんですか？」

「……………」

「どうやら本当に教える気が無いらしい。」

俺は、質問を切り替えた。

「このゲームを拒否することは？」

「できません」

「それでも拒否すると？」

「永遠にこの世界に残って頂きます」

何としても参加させたいらしい。

「『死ぬ』っていうのは？」

「言葉通りの意味です」

「つまり、生物的な死ってことでいいの？」

「そうですね。そういうことになります」

「……つまり、俺が選ばなかった人は現実で死ぬんだね」

「はい。——さあ、里谷理人、あなたは誰を選びますか？」

「選ばれなかった少女は死に、選ばれた少女は生き残る。なんてクソゲーだ。」

俺は、しばし考えてから言った。

「……選ぶ、なんて言われても、できるわけがない」

「……つまり、誰も選ばない、ということですか？」

俺は言葉に力を込め、スピーカーへと向き直った。

「違う、俺にとって、みんなは大切な存在なんです。俺は、あいつらの中から、誰ひとり欠けてしまうことは、決して耐えられない。」

だから、その中から選ぶとしたら、『全員』だ」

「……………」

《夜天少女》は沈黙した。しばらくして、

「……その選択に、後悔しませんか？」

俺は即答する。

「しません」

「本当に、その選択でよろしいでしょうか？」

俺は、何度も聞いて来る《夜天少女》が、俺を疑っているのだと判断

し、スピーカーを覗んだ。

あんな、どれほどつらくても、どれほど苦難があろうとも、「はい、あなたが何と言おうと、俺の意思は変わりません」やると決めたらやる。それが俺だ。

納得したように、《夜天少女》は言う。

「ふふっ……さすがです」

スピーカー越しに《夜天少女》の笑い声が聞こえた。

「どうやら、求めていた答えのようだ。」

「貴方を解放しましょう。ドアから出れば、直ぐに目は覚めますよ」

俺は言われた通り、ドアを開けてみた。

「おっ、先ほどとは打って変わってあっさり動くぞ。」

ドアからでる直前、《夜天少女》は言った。

「御用がありましたら、いつでもお呼びください。直ぐにあなたをこちらに召喚しますので」

誰が呼ぶもんか。

※ ※ ※

目が覚めると背中に、全てを包みこむようなやわらかい感触。起き上って見てみると、ただの敷布団だった。

……夢オチ？ まさか。

俺は、さっき見た夢の内容を頭の片隅におきつつ、朝食を済ませ、夏休みの宿題をしていると、十七時になった。

小日向さんとの約束は十八時だから、もうそろそろ行ったほうがいいな。

俺は身だしなみを整えてから出発した。

外に出てみると、日差しが眩しくて思わず目を細めた。

「うわっ、暑っ！」

もう汗がでてきたよ。

暑いのを我慢しつつ、俺はとじまりをしながら、

「いってきます」

と言った。

デート。デートか、いい響きだな。

これからも小日向さんといちゃいちゃしたいから絶対に今回のデートを成功させないと！

集合場所の第一噴水は、自宅から歩いて十五分くらい歩いた場所にある。

噴水の冷却効果は、打ち水やドライミストなどと比べると、地面の副遮熱に対する冷却効果は低いが、広範囲にわたって空気の温度を低くする効果があるから、集合場所には持ってこいなんだとか。

などと、親父が言っていたことを思い出しているうちに、噴水が見えて来た。

第一噴水の周りはロータリーになっていて、交通量も多いから注意が必要だ。

慎重に、車が来なくなったタイミングを見計らって、道路を横断する。待ち合わせ場所に着いたが、誰もいない。大時計を見ると、九時半。

まだ、待ち合わせの時間まで三十分もあるな。どうやって暇をつぶさうか。

待たせてしまった、と思わせてしまうのは気が引けるから、ケータイを弄る、は無しだな。そう考えると、周囲を散策、も無しになる。

あれこれ考えているうちに、二十分が経過した。

もうそろそろかな？

そう思って第一噴水の入り口を見ると、道路を挟んだ向こう側に、浴衣を着た小日向さんを見つけた。内またで走る様子が可愛いらしい。

なんだ、誰も死んでないじゃないか。

と思っていると、あちらもこちらに気づいたらしく、小走りで向かってくる。

「慌てなくてもいいよー！」

と言ったが、スピードを緩める気配はない。そして、

横からやってきた大型トラックにはねられた。

——え？

一瞬のことだった。

トラックはそのままブロック塀に突っ込み、赤い何かをまき散らした。「あ……え？」

……何が起きたんだ？
呆然。

「……小日向、さん？」

呼びかけてみるが、返事はなかった。

「……小日向さん！」

思い出したように、衝突した場所へ駆け寄る。

碎けたブロック塀、ひしゃげたフロント、その間に彼女はいた。

小日向さんは、死体となつてはさまっていた。

※ ※ ※

そこからの記憶はあまり覚えていない。気がついたら自分の部屋にいた。ケータイ電話の発信履歴をみるあたり、救急車に電話したのかな。

あんな目の前で、分かりやすく好きな人が死んだというのに、まだ実感できないや。

ふと、《夜天少女》の言葉が蘇った。

——選ばれなかった少女は死に、選ばれた少女は生き残ります——

「……まさか《夜天少女》の仕業なのか？」

俺がそう言うと同時に、強烈な眠気が襲った。眠りへと誘うような、優しく、心地のよい感覚。俺は、あっさりと眠ってしまった。

——ここは？

気がつくところこそは、満留ちゃんと待ち合わせた場所。そして、満留ちゃんが死んでしまった場所。

「どこかしら？ 里谷君の選んだ結果は」

どこからか声がした。

「……誰？」

「ふふふ、知っているくせに。——《夜天少女》よ」

声色は明らかに《夜天少女》だが、口調はまるで別人だった。

「……なんで、満留ちゃんを殺したんだ？」

恐る恐る聞いてみると、

「違うわ、みんなを殺したのは里谷君よ」

——みんな？ みんなって？

「あら、まだ知らなかったの？ まあいいわ、一度現実世界へ戻してあげる。——そうね、ケータイを確認してみたらいいんじゃない？」

瞬間、意識が覚醒する。気がついたら自分の部屋で横たわっていた。

俺は、自分が戻ってきた事を確認すると、直ぐにケータイを見た。

ケータイを開くと、メールが何件もある。一件ずつ開いてみた。

コーヘイ……うちの学校の生徒が車に轢かれたらしいぞ。

親父……理人、千秋ちゃんがさつき、車に轢かれた。今病院にいる。

——などと、どのメールも、小宮と千秋が死んだ旨の内容だった。

半分ほど読んだくらいで、

「もう嫌だ！」

ケータイを力任せに投げた。

ガン！

壁に当たって鈍い音を立てる。

「なんなんだよ……これ……」

ふと、《夜天少女》の言葉を思い出した。

——選ばれなかった者は死に、選ばれた者は生き残ります——

数分ほど経って、再び強烈な眠気が襲った。

「どうだった？」

どこからか《夜天少女》声が聞こえた。

「……」

「ふふふ、もう嫌だ、って顔ね」

「……」

「まあ、誰か選べって言われて、全員を選ぶなんて、ただの揚げ足取りだものね」

「……」

「とりあえず、誰も選ばなかったとみなして、全員死なせました」

「……」

「何か言ったらどう？」

「……」

「はあ、なら、もういいわ、帰りなさい」

「……」

「それじゃ、またね」

気がついたら、俺は、自分の部屋で横たわっていた。

俺は、みんなが行きそうな場所をしらみつぶしに探すことにした。

親父は、今日も夜勤なのか、玄関に靴は見当たらなかった。

俺は、しらみつぶしにみんなが行きそうな場所を探した。それこそ、足が棒になるくらいまで。しかし、

「だめだ、どこにもいない」

わかりきっていたことだ。もう、三人は死んでしまったんだ。

俺はふと、母さんが出て行った時のことを思い出した。

俺は、大人なんだから、と、親父と母さんが喧嘩したときでも、まあなんとかなるだろう、と、何もしなかった。俺が根拠なく何もしなかった結果的、二人は離婚して、母さんは、俺達をおいて出て行ってしまった。

「俺は、あのときから全く成長できていないのか？」

胸の中で吹き荒れる郷愁と後悔と自己嫌悪。頬に涙が伝って来た。

しばらく涙があふれるままにしておいたら、いくらか落ち着きを取り戻せてきた。

もう、帰ろう。

そう思って立ち上がった時だった。

「そこで何しているの？」

俺は、ヒロイン 四人目の少女と出会った。

【暗転】